リスクコミュニケーションにおける対立情報回避

放射能・食品リスクに関する情報源信頼性とリスク認知

○楠見 孝¹・平山み²・嘉志摩佳久(非会員)³

(¹京都大学大学院教育学研究科・大阪音楽大学短期大学部・³メルボルン大学心理学部)

キーワード：リスク認知，情報統合，態度変容

Conflict aversion in risk communication: Source reliability and risk perception in radiation and food risk

Takashi KUSUMI¹, Rumi Hirayama², and Yoshihisa Kashima^{3,*}

(¹Graduate School of Education, Kyoto University, ²Osaka College of Music, ³University of Melbourne)

Key Words: risk perception, information integration, attitude change

ある論争点について賛否両論がある場合，2つの情報源がそれぞれ相反する片面の論点を提示する場合（対立情報）と，1つの情報源が賛否両論を提示する場合（曖昧情報）がありうる。Smithson（1999）によると，どちらの場合も情報量は同じなのに，対立情報を忌避し，曖昧情報を好む傾向がある。説得力や態度変化の研究でも曖昧情報の方が，対立情報よりも説得力や情報信頼性が高いという研究は多いが（Hovland et al., 1949），異論も多い（Balch, 1981; Kamins & Assael, 1987）。

楠見・平山・嘉志摩(2013,日心)が，低線量放射線の健康影響という論争的話題について，曖昧情報と対立情報による市民のリスク認知や信頼度変化を調べたところ，対立情報よりも曖昧情報を好むとする傾向は見られず，どちらの条件でも，リスク認知が低下した。しかし，片面危険提示した情報源が，片面安全提示した情報源または両面提示した情報源よりも信頼度やわかりやすさが高いと評定された。

そこで本研究では，対立情報と曖昧情報の選好の差があるかどうかをより単純化された手法で，放射能と牛レバー生食のリスクについて検討する。また，情報を同時提示から継時提示に変えて，情報統合のされ方の変化を検討する。

方 法

実験参加者 被災県 586 人（福島・宮城），首都圏 1214 人（東京・千葉・埼玉）の 24-60(平均 43.4)歳の計 1800（男 922，女 878）人。短大卒以上の学歴，子どもをもつ既婚者。会社員 43%，主婦 28%。2014 年 3 月にオンライン調査を実施した。

手続き ①情報提示前：(a) 情報源信頼性評価（5段階：行政，新聞など），(b) リスク認知：低線量放射線による食品を通しての健康への影響と牛レバー生食についてリスクの5段階評定（1:危険がない-5:ある），およびその確信度の5段階評定（1:自信がない-5:自信がある），(c) 放射能とレバー生食に関する対立(片面)情報(例:一方は健康影響あり，他方はないと主張)-曖昧(両面)情報(例:一人が健康影響はある場合とない場合の両方があると主張)への選好(専門家集団，新聞記事，専門家集団と行政の3通り)，(d) 感情評定，メディアリテラシー，放射線知識クイズは，楠見ほか(2013)と同じであった。

②情報提示：情報内容は食品中の低線量放射線の健康影響あり（pro）となし（con）の議論について2名の大学教授（ソースが議論サイトに投稿した各2つの記事を読む2条件（参加者間要因）を設定した。片面提示条件(895人)はK教授（P1+P2）とM教授（C1+C2），両面提示条件(905人)はS教授（P1+C2）とT教授（C1+P2）であった。各記事は約750字で，二人の記事を継時的に提示した。2つの記事の読み時間は2分以上とした。最後に，政府作成の低線量放射線の健康影響に関するポスター3枚を全ての参加者に提示した。

③情報提示後：従属変数として，情報（P1,P2；C1,C2）および情報源（K,M,T,S教授）についての信頼度，わかりやすさ，情報の伝達意図（人に伝えたいと思うか）の5段階評定，配偶者と友人への伝達意図，および低線量放射線の危険性について，どのように伝えたいかを，それぞれ5択で選択させた。

表1 対立-曖昧情報の選好比率のリスク，情報源による差異

評定と情報源	放射能食品汚染		牛レバー生食	
	対立	曖昧	対立	曖昧
心配になる				
専門家集団	50.7	49.3	47.0	53.0
新聞記事の専門家2名	51.2	48.8	47.6	52.4
専門家集団と行政	53.6	46.5	49.1	50.9
知見が豊富				
専門家集団	37.0	63.0	37.6	62.3
新聞記事の専門家2名	39.9	60.1	42.6	57.4
専門家集団と行政	46.8	53.2	43.8	56.2
信頼できる				
専門家集団	36.1	63.9	36.4	63.7
新聞記事の専門家2名	38.9	61.1	40.0	60.0
専門家集団と行政	44.4	55.6	43.1	56.9
情報受け取りたい				
専門家集団	36.1	63.9	38.2	61.8
新聞記事の専門家2名	39.5	60.5	41.9	58.0
専門家集団と行政	45.5	54.5	44.3	55.6

結 果

対立-曖昧情報に対する選好 表1に示すとおり，選好のボタンは，曖昧情報を対立情報よりも好む傾向があり，放射能と牛レバー生食では類似していた。情報によって心配になるということについては，両情報とも同程度であった。

情報および情報源の評価 「わかりやすさ，情報の信頼度，伝えたい」の全てにおいて，片面危険提示($M_s=3.4,3.4,3.3$)は，両面提示($M_s=3.3,3.2,3.2$)，片面安全提示($M_s=3.2,3.1,3.1$)よりも平均評定値が高かった(片面危険-安全の差は $p<.05$)。

リスク認知の変化 情報提示前後の低線量放射線のリスク認知および確信度評定には，片面-両面提示の条件間，被災地と首都圏間で有意差はなかった。全条件とも提示前(片面 3.5，両面 3.5)に比べて提示後のリスク認知平均評定値(片面 3.3，両面 3.2)は有意に低下した ($p<.05$)。確信度評定は変化がなかった。5段階の評定カテゴリにおける変化を見ると，変化無し 51-53%，危険度低下 21-24%，危険度上昇 12-18%であった。

リスク認知に及ぼす個人差の要因 図1に示すように，片面-両面提示とも事前リスク認知，不安評定と合致する判断であった。批判的思考態度，メディアリテラシーについては「危険なし」「危険あり」の両極で評定が高く，「危険なし」は「わからない」評定者よりも原発知識は有意に高かった ($p<.05$)。

図1 情報提示後の食品放射線リスク判断と個人差指標